

論文十四

宜蘭県蘇澳郡南方澳漁港の発展 に貢献した愛媛県西宇和郡二木 生村(三瓶町)の漁業移民



古川勝三

《台湾を愛した日本人》作者



▲ 現在の三瓶町の略地図

三瓶町の南西は宇和海に接続し、南は奥深く切り込んで三瓶湾を形成しているが、山が海まで迫っていて平地は少ない。そのため段々畑を耕して麦や芋を植え、蚕を育てて生計を立てるしか道のない貧しい寒村であった。従って、農業より漁業が盛んで打瀬船を操って玄界灘や朝鮮半島まで出かける漁船もあった。

明治35年(1902)に長早の漁師、濱田愛太郎は5人乗りの打瀬船「住吉丸」を使って長崎県対馬 沖で漁をしていた。この時、大分県の漁師が行っているカジキマグロの突き棒漁法を知り、乗組員の浜田正秀、松本清造、菊池亀介、山本与平と共に初めて目にした漁法を教えてもらい習得した。地元へ帰港し突き棒漁法を伝授したところ、「戒丸」の仲川磯五郎も参加するようになった。



明治時代に使われた打瀬船 ▶

愛媛県西宇和郡には昭和29年まで二木生(にきぶ)村が存在したが、昭和の合併により三瓶町に組み込まれた。さらに平成の合併により現在は西予市三瓶町になっている。

二木生村はもともと宇和島藩だったが、明暦3年に宇和島藩が分家をつくった際に周木浦、二及浦、垣生浦が吉田藩領に組み込まれた。やがて、明治になると地名から一字ずつ取り二木生村が誕生した。昭和になって二及から長早が分かれ大字になった。

大正5年頃からは漁場が対馬海域から南の男女群島や五島列島に移動した。大正10年になると千葉の漁師から動力船の事を聞き、焼き玉エンジンを搭載した15~25馬力の機械船での効率よい操業ができるようになった。主に9月から12月の4ヶ月間に集中して操業していたが、大正13年頃になると対馬近海での不漁が続いた。

その頃に濱田愛太郎が南宇和郡城辺町(南宇和郡愛南町)久良のサンゴ採取業者の小泉重太郎氏から「台湾近海には良い漁場がある」と教えられた。そこで、大正13年2月になると「住吉丸」に乗り込み、台湾の玄関港である基隆を目指した。乗組員は大橋亀吉、浜口千代吉、宮本建助、菊池亀助、垣田磯吉、大鼻彦右衛門、管宗重の大人に交じって少年の中川賢一と宮本富太郎が居た。

「住吉丸」はトカラ列島や沖縄を經由しながら25日間かけて基隆に到着。その後、台北州宜蘭県蘇澳郡南方澳庄に回航し、蘇澳湾に入った。湾の南に立派な南方澳漁港があり、ここに係留した。この港は台湾総督府が2年の歳月をかけて大正12年6月に竣工していたが、ほとんど使われていない状態だった。

碇を使わなくても係留できる便利な港であるだけでなく、競争相手の漁船も少なく漁場も近く、魚影も濃く大漁が続いた。その結果、半年後の秋になると大金を手にして、翌大正14年5月に三瓶町長早に帰港することができた。

台湾での大漁話で地域は沸き返り、台湾への出漁を熱望する漁船が続出、最終的には「住吉丸」を含め9隻もの出港が決まった。漁期は9月に帰港し、大正15年4月上旬には全船帰港することに決めた。

5月から8月の期間は麦刈りと芋の苗植えそれに蚕の五令の最中で忙しいうえに、この時期は風が続き凪の海ではカジキが海上近くに姿を見せないため不漁が多いからであった。

大正14年9月に二木生村から出航した6隻の突き棒船は、南方澳漁港に着くと驚く光景を目にした。

港の離れに20戸ほどの住宅が建築中で、港の周りでは貯氷所や給水施設、それに魚市場の工事が始まろうとしていたのである。

かつての蘇澳は宜蘭の南東に隣接する土地で、10戸ほどのカバラン族しか住まない自然のままの場所であった。

台湾本島は九州より少し小さい程度であるが、海岸線の長さは九州の3分の1しかない。すなわち、入り江が少なく天然の良港に恵まれていないのである。しかも、東海岸はフィリピンプレートが花蓮港あたりに潜り込んでいるため西海岸と違って水深が100 0m以上もあり、港を造るのに適した場所はない。

蘇澳には東海岸には珍しく風波を凌げる湾があり、沖を流れる黒潮に乗って北上するカツオ・マグロ・カジキ・フカ・サワラ・ブリやタイ・アジ・イワシ・トビウオなど豊富な魚種が獲れる好漁場であったが、放置されていた。

台湾総督府は農業移民に力を入れたが、良港を持たないため漁業移民についてはほとんど手を付けていなかった。

当然、総督府も調査結果から蘇澳への漁業移民を行えば立派な漁業の街ができることは知っていた。そこで、総督府は大正10年(1921)に蘇澳 港の整備に乗り出し、大正11年に蘇澳まで道路が開通するのに併せて、2年の歳月と66万円余の費用をかけ、大正12年



(1923)6月に竣工した。その結果、26万ヘクタール余りの埋立を実施し二つの船溜りを完成させた。

◀ 整備が進み移民後の南方澳漁港

第一船溜りは長さ450m、利用水面3万3千ヘクタール。干潮時水深1.8mを有し、第2船溜りは長さ459mに42900ヘクタールの水面で2.7mの干潮水深を有する立派な港にしたのである。ところが、冬期に基隆の漁師が仮停泊地として利用する程度で、定住する漁師はなく漁港としての役割を果たしていなかった。まさに「宝の持ち腐れ」状態の漁港だった。そこで総督府は大正15年までに魚市場や貯氷處、給水設備、灯台等を設置し、利便性を向上させるための工事をしていたのである。

目的は漁業移民が定住するように台湾総督府殖産局水産課が「内地人漁業移民奨励事業」を立ち上げ、地方庁である台北州に対して補助金を出すことにした。

この計画は49戸189人を2年間で蘇澳に漁業移民として迎えるというもので6.5万円余の予算を付けていた。

台北州は総督府の意向を受け移民事業を開始するにあたって、募集条件を決めた。

- 1.移住者は家族と共に台北州知事の指定する家屋に居住し、漁業に従事すること
- 2.台北州より貸与または支給するもの

(1)1戸10坪の住居の建築費用の半額補助。償還期間は4年目より10年間

(2)5戸~6戸ごとに漁船建造費等の半額補助。償還期間は2年目より5年間。但し鯉漁船の償還期間は3年目より10年以内。

二木生村からの6隻の突き棒船は、半年近い操業を終え、予定通りに3月末に帰港準備をしていると、驚く話を耳にする。

「家族と定住しない漁船は、南方澳漁港を使つての操業はできなくなる」というのである。さらに「移民の勧誘が今年中に行われ、その移民用の住宅が造られている」ともいう。入港時に見た建築中の家は移住者用の住宅だったのだと思い出していた。

移住しないと来年の操業はできないとの不安を感じながらも、4月には無事帰港できた。

その3ヶ月後、大正15年7月には、募集条件を携えて台北州の水産技師宮上亀七が漁業移民の勧誘と選考を行うため高知県を訪問した。高知県に的を絞った理由は、人口増加により漁村が疲弊していたため、移民の渡航費用を県が補助する予算を付けていたことに加

え、高知沖の漁場が蘇澳のそれと似ていたことによる。

高知に着いた宮上技師は、高知水産会の協力を取り付け、共に漁村を廻って勧誘した。その結果26戸の希望登録があり、1年目としては上々の出だしであった。選考の結果、最終的に20戸89人が確定し、11月に移民してくることになった。

台湾日日新報は11月16日の紙面で「第1次蘇澳漁業移民一家を挙げて移住してきた20戸89人の大人数」の見出しに続いて「15日早朝入港の笠戸丸で基隆港に到着し、台北州の水産関係者が出迎えその後、宜蘭線に乗り蘇澳に向かった。……」と報じた。

この年の12月25日に大正天皇が崩御し、元号が昭和に変わった。短い昭和元年だった。昭和2年9月には第二次漁業移民募集が宮上亀七技師によって行われた。その結果、愛媛県18戸、高知県6戸、長崎県4戸、大分県1戸計29戸の移住が決まった。

2回の募集によって当初の計画である49戸189人を超えて、49戸198人が移住することになったのである。高知県の出身地は幡多郡清水町に次いで宇佐町がおおかった。一方愛媛県ではすでに蘇澳での漁を経験している三瓶町の漁師だけであった。

移民する人数は戸主である仲川磯五郎、山本宇吉、松本久松、松本清造、西田勘助、木下金治、戎井磯次郎、大鼻彦右衛門、原田義元、菊池亀助、原内虎吉、芝多平、土井安太郎、久保田庄太郎、上田佐與吉、仲川源吾、河野重兵衛、濱口千代吉を含め70人近くになった。

移民は漁船で直接蘇澳向かう者と内台航路を利用して移住する者に分かれた。7戸が漁船で11戸が内台航路を利用しての移住であった。当時の内台航路は神戸→門司→基隆を8~9千トンクラスの客船が3泊4日で航海していた。門司に行けば2泊3日の航海である。

昭和2年の晩秋、蘇澳に行く漁船が二及の浜に勢揃いした。三瓶町民総出の見送りになった。内台航路組の家族も、蘇澳での再会を願い見送った。

内台航路組は九州に渡り門司で大和丸に乗船して、12月10日の朝には基隆に到着した。初めて見る台湾の街であった。

基隆からは汽車に乗って蘇澳まで走り、蘇澳からはバスに乗り40分ほどで南方澳に着いた。そこには総督府が移民用に建築した1棟2戸建10坪の宿舍が用意されており、決められた家に入居し旅の疲れを癒やした。こうして、移住第一日目が終わった。愛媛 県からの移住に関する報道は、12月11日の台湾日日新報に掲載された。

「蘇澳郡南方澳漁港における前年度移民は30戸の予定であったが此内愛媛県より来る11戸40余名に対し11月28日付けで移民の居住が正式に許可された」と報じいる。

その上「台北州の予算により移住者用の1棟2戸建て住宅30戸が完成した。これは先年度完成の20戸より漁師が利用しやすい造りで、住み心地良さそうである」とも記述している。

移住地は台北州宜蘭県蘇澳郡南方澳庄であった。南方澳漁港にはカツオ船2隻、カジキ突棒船9隻、それに延縄船7隻、曳縄船14隻で台北州からの貸与船は4隻で27隻は内地から乗ってきた持ち船であった。

移住した全員が漁で生活するわけではなく、長早の山本宇吉は漁をする傍ら酒屋 を開き大いに繁盛していた。また雑貨屋を行う者もいたが、大半は持ち船の突き棒船を操って、カジキ漁を行った。



▲ 総督府が用意した移民村住宅



▲ 突き台と櫓のある独特な突き棒船

カジキには主にマカジキ、メカジキ、サンマカジキの他にマカジキ科の黒皮カジキ、白皮カジキ、バショウカジキがいる。カジキは暖流に分布し最も大きいカジキはメカジキで体

長は1.5~3.5m、重さ50~250kgにもなる。小さいサンマカジキでも1~1.5m、15~40kgもある。マカジキは2~3m/秒の風が吹くときに水面に出てくるが、凧では出てこない。メカジキは逆に凧の時に出てくるという習性がある。

その習性を知って行うのが突き棒漁法である。この漁法は海面近くを泳ぐカジキに、ロープの付いた3~5mの突き棒を投げて突き立てて捕獲する漁である。

突き棒の先には30cmほどの大銚を付けこの銚に14番線ワイヤーの付いた小銚を付け、カジキに突き刺さると矢尻が外れて食い込み外れない仕掛けになっていた。

南方澳漁港の沖に向け1時間ほど走ると黒潮の流れる漁場に着く。突き棒船の中央には櫓が組まれていて、ここで見張りを行う。船が揺れる中で船首に突き出た突き台で突き棒を構えてカジキが浮き上がってくるのをじっと待つことになる。突き台には突き役の3人と通称二番と呼ばれる操縦席に操船を伝える係の4人が立つことになっていた。突き役の3人のうちオモカジと呼ばれる船頭が中央に、トリカジと呼ばれる二番手が左に、見習いの三番モリと呼ばれる突き役は右に陣取ることになっていた。

2~3mも上下する船上の突き台に立ち、重い突き棒を持つての作業は、重労働であった。勝負は目の良さと腕前だけであった。漁獲高は突き役の特技わざによって決まった。一人前に突き棒を操るには数年の経験が必要であり、命がけの漁であった。しかし、魚影が濃く出漁するたびに大漁が続いた。疲れも吹っ飛ばすほど獲れた。



▲ 突き台でのカジキ漁

移民して半年もしないうちに、突き棒船は黄金期を迎えた。カジキ漁は10月~3月の漁繁期の半年だけ行い、夏場の漁閑期には、基隆に出稼ぎに行く者や三瓶に帰り農作業をする船もいた。

獲れたカジキの55%は台湾用に45%は内地に送ることに魚市場が決めていた。内地用は内臓を出した後氷詰めにして、基隆から送ると関西で高値が付いた。そのため他県の漁師より収入が多く、新たに土地を購入し、立派な家を建て豊かな生活する漁師が多かった。

移住した翌年には12代川村竹治総督が視察に訪れるほどになった。この時、総督に対して防波堤を作り港の拡張を訴えた結果、総督府による資金投入もあり、企業が進出し造船所や鉄工所それに日本石油の給油所がそれぞれ3カ所も開業した。

昭和10年代に入ると、豊富な資金で40~50馬力の大型船が次々と建造され、16隻もの大型漁船が南方澳漁港に舫われていた。乗組員は身内や親戚の者になるのが通常だったが、人手が足りないと現地人を雇って漁を続けた。船によっては船長だけが日本人で他は現地人という船もいた。

港湾や道路へのインフラ整備と相まって利便性が増し、昭和6年末の調査では、南方澳に住む人間は、漁師ばかりでなく台湾人や沖縄人も住むようになり308戸1164人に膨れ上がった。人種では日本人642人、台湾人401人、朝鮮人7人や現住民族などで基隆に次ぐ漁業の街として栄えた。

順調に、平穩に、豊かな生活を送っていた昭和12年(1937)7月7日、盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が始まると、これまでの平和な生活が蝕まれていくことになる。

軍によって大型船と共に乗組員までもが徴用され、物資の輸送や上陸作戦に参加させられる事が続いた。南方澳漁港では残された小型船で細々と漁をするしかなかった。

昭和16年に大東亜戦争が始まると、台湾での生活に見切りを付け、これまで貯めた財産を処分して、大金を持って故郷へ帰っていった家族もあった。この時帰った家族は、運が良かった。

南方澳では戦争の激化によって乗組員と燃料の不足が酷くなり、突き棒漁は衰退の一途をたどった。昭和17年になると、突き棒漁がほとんどできなくなり、台湾での生活に見切

りを付けて、大半が船で故郷に帰って行くようになった。

南方澳に残った者は、2~3トン足らずの小船で細々と漁をして食いつないでいたが、昭和20年8月の終戦により状況は、一変した。

永住する積もりでいたにもかかわらず、日本人の引き上げが強制的に実施されることになり、昭和21年4月には、日本人の引き揚げが開始された。船も財産も全て没収されリュックサック2個と千円それに帰国中の食料だけ持った引き揚げが始まった。移住してきて30年余り、南方澳での生活が水泡に帰したのである。

住民にとっては、繁栄と挫折の30有余年であった。故郷に帰ってみると、先に引き揚げた家族や地元民に助けられた。その内誰とはなしに南方澳での突き棒船を造ろうという話になった。資金を出し合い突き棒船が造られ、突き棒漁を再開することができるようになった。さらに蘇澳で身につけた延縄漁でサバ漁も行われ、長早の突き棒漁、周木のサバ漁として有名になっていった。しかし、突き棒船に乗る者は、年々いなくなり三瓶町で最後まで突き棒漁を行っていた垣下賢介さんも令和になった年に亡くなり、三瓶における突き棒漁の歴史に幕を閉じた。

往年の隆盛を極めた突き棒漁に関する遺構は、中川磯五郎と山本宇吉が世話人になり、突き棒漁に感謝する証として昭和3年に建立した「羽魚突紀年碑」だけが残るのみである。



▲ 三瓶の紀年碑

一方、南方澳に漁業移民が残した資産や技術は台湾人に引き継がれ、その後も繁栄をもたらした。現在の蘇澳は1万4千戸、人口4万人を超える台湾三大漁港の一つに成長し、台湾海軍の基地が造られ、重要な港湾となって繁栄を続けている。この陰には、永住を目的に移住し、蘇澳港の発展に貢献してきた漁業移民がいたことを忘れてはいけない。



▲ 現在蘇澳湾の南方澳魚港

参考資料

- | | |
|---------------------|-------|
| 1.戦前前期台湾における日本人漁業移民 | 除本理史 |
| 2.長早の突き棒船について | 浜田一美 |
| 3.三瓶町誌 | 三瓶町編纂 |
| 4.写真提供 | 古川勝三 |



論文十四

宜蘭縣蘇澳郡南方澳漁港の發展に 貢献した愛媛県西宇和郡二木生村 (三瓶町)の漁業移民

評論人 | 卞鳳奎

國立臺灣海洋大學
海洋文化研究所教授

首先，謝謝戴寶村教授邀請我參與這個盛會，讓我有學習的機會。為什麼說學習呢，因為拜讀完老師的論文令我感觸良多，在2018年奉我的指導教授松浦章老師指示，指稱高知大學吉尾寬教授在進行「黑潮文化圈移民的調查」，讓我作為引導，帶吉尾寬教授前往蘇澳口訪當地耆老。但因我本身也不是很熟悉，所以就找了老朋友；昔日在宜蘭大學任教的陳進傳老師協助。經陳老師引薦，認識蘇澳在地前輩廖大慶老師。透過廖老師熱情的介紹，讓我們收獲良多。松浦章老師得知後，就讓我也寫一篇文章，題名是〈日本統治時代台湾の漁業展に寄与した日本籍漁業移民と知識人〉，發表在2018年11月《南島史學》第86號。但今天拜讀了古川先生的大作後，覺得自己不足之處仍多，應該向古川老師多學習。

第一、古川先生的文章是海洋移民為題的論文，這點與台灣學者的論述方式不同。因為，在台灣所談論海洋移民，通常會將移民與漁業分開討論。例如移民政策方面的討論，可以中研院林玉茹老師為代表，採取從政策性的移民的策略分析探討。其次是以以前農委會副主委胡興華老師為例，以移民後水產的產量作為議題研究。但不論是前者或後者的研究，都會缺少對移民地的探討。而古川先生的論文補足了我們這方面的欠缺，這是非常了不起的。

第二、從古川教授的論文可了解到，移民者不論是遷移到何地，都會帶著他們的技術，例如漁民來時依舊帶著捕魚技術，在台從事漁業，但同時也傳承給我們捕魚知識。譬如我們知道了愛媛縣捕捉旗魚方式，是從大分縣學習後，再傳到臺灣。這也成了一種技術的循環。其次，我們也可以從移民政策中看出，日本推動此政策是非常有計畫性

的。都是事先規劃妥當後，才開始正式鼓勵住民向海外地區移民。例如，透過古川老師的論文，了解到日本政府為推動漁業移民政策，在漁民尚未來到臺灣之前，對於應該提供移民者的相關設備，已妥善準備。足見他們對於漁民的關心與照顧程度，是非常令人敬佩的。

其次，論文中也可以看到，移民來到南方澳漁港後，由於努力有成，漁獲量增加，所捕獲的旗魚45%輸往日本關西地區，使得台灣總督府與水產的經濟收入大大提高。再者，文中亦可看出，愛媛縣漁民移民到蘇澳後，他們都過著幸福美滿的生活，這點是我們臺灣學者比較少談論的問題。最後，漁業移民對台灣的影響確實很大。直接影響就是可以教我們捕魚，把技術帶到台灣，進一步來說，台灣人學會了開船，之後就會想買船。再來就是鐵工廠，因為船需要修理，之後自然會有台灣人想要參與此產業。在日治時期除了日本人從事鐵工廠之外，當時在蘇澳已有出現是台灣人經營的鐵工廠。至於間接影響，例如蘇澳地區有相當多水產公司的出現，也造就了台灣人的商機。

最後有幾個小小的建議：

第一、因為宜蘭縣做了很多調查，已經有很豐富的成果，可以增補。論文中所提的成功例子，其實在《宜蘭文獻》中已記載許多，例如黃春生先生的父親以前就是開船為業，也是因為曾向在蘇澳的日本人學習到開船技術。或是很多靠水產致富的蘇澳在地商人；例如蘇澳水產株式會社監事的張春榮、臺北州水產會議員的陳火土等人。都是很好的案例。

第二，文中提到將捕獲的旗魚賣到關西的部分。我想請教，1.為何會賣到關西？是因為價錢很高嗎？還是因為日本大阪是他們的美食之地呢？2.因為古川先生描述愛媛縣人民，都是比較幸福快樂的一面，但他們辛苦的一面；和台灣人的互動狀況等，有沒有實際的案例呢？

